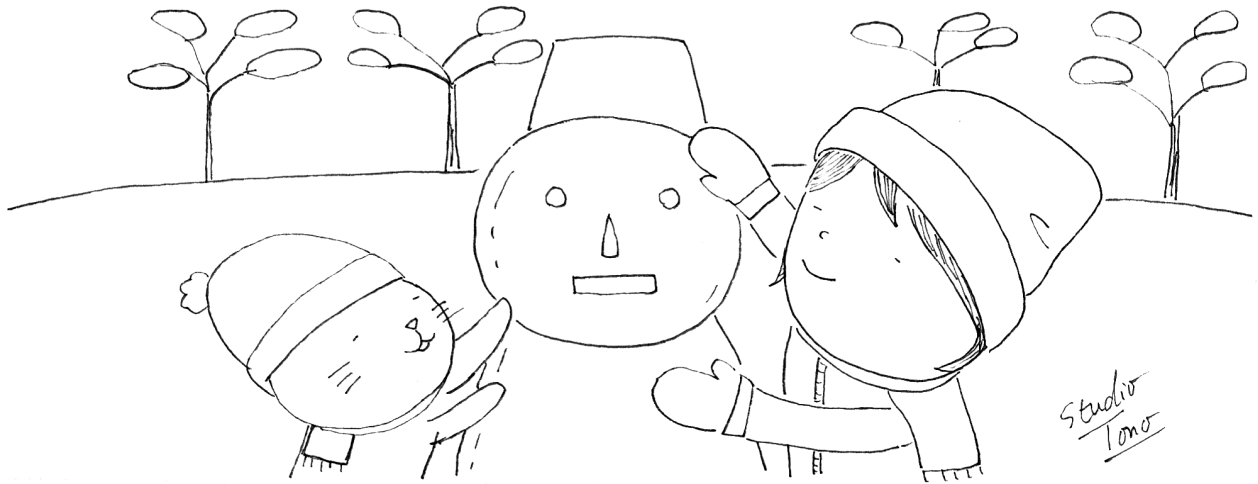
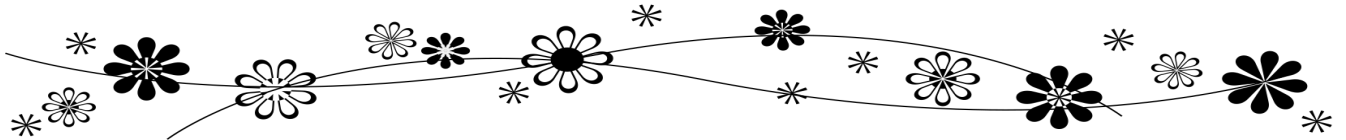


ボランティアグループがつくる和歌山県男女共同参画センターの書評誌

この本よんだ？

～りいぶる BOOK プラス～



オレの宇宙はまだまだ遠い

益田ミリ 著 講談社 2012年 (Q:コミック)

益田ミリさん、画風と文章が淡々としていて、ほんわかのイメージですが、実は、女性の生き方には確固とした気持ちがあるようです。だからこそ、我々と等身大の日常の細かい喜びや怒り、違和感や共鳴するところに敏感で、女性に人気なのかもしれません。

今作は、30代独身男性書店員が主人公。本屋さんを訪れる様々な人々と接しながら、自分なりに、仕事を全うしようと頑張る姿や、本好きのきっかけとなった伯父さんとの別れ、そして、淡い恋愛模様が、共感を伴い、力むことなく、異性の私の中にも入ってきます。さ

あ、彼の目指す宇宙はどこにあるのでしょうか？

作中に、作者自身が登場したり、おなじみの他の益田作品とシンクロしたりもします。また、舞台が本屋さんなので、数々の名作が素敵なエピソードとともに紹介されています。本好きには、ちょっとした楽しみです。ね。

(I.K)



女は下着でつくられる

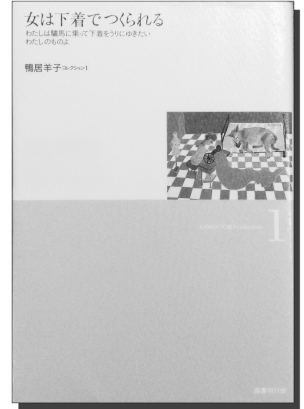
鴨居羊子 著 株式会社国書 2004年 (K:エッセイ)

まずは装丁の美しさ、本の最初に収められている不思議な写真と絵に惹かれてこの本を手に取りました。色使いも内容も著者の非凡なセンスや才能をよく伝えています。そして、彼女の文章は淡々としているようで、具体的で、でも、どこか夢をみているようでもあり、とても味わい深く読み進めることができました。

著者の鴨居羊子さんは新聞記者を経て下着デザイナーになった方です。この本の中では主に会社創業初期のことが書かれています。そして、注目すべきことは彼女が下着のデザインをしていただけでなく、全てを行っていたことです。製造・材料仕入れ・宣伝・営業・採用・テナント探しまでです。その上、私生

活では病気の母親と売れない画家の弟を養っていました。本文中からは、新しい下着作りに夢中になりながら会社の資金繰りに苦しみ、自由な生活を送りたいと葛藤する様子がさまざまと伝わってきます。どの年代の方も自分と重ね合わせてしみじみと読むことができると思います。また、本の舞台である大阪の雰囲気のある描写も併せてお楽しみください。

(A. T)



にじいろガーデン

小川糸 著 集英社 2014年 (K:エッセイ・文学)

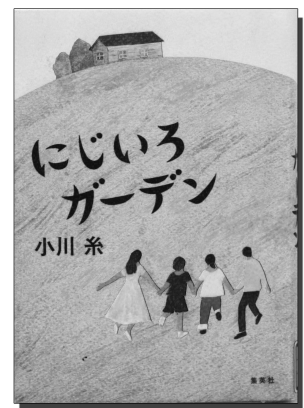
この著者の小川糸さんは「食堂かたつむり」とか「つるかめ助産院」とか映像化されたような本を書かれているとのことで、何の予備知識もなく本を手にとった。しかし、読んでみると、ただの小説ではなく、レズビアン(女性の同性愛者)とその子ども二人の家族4人の目からみた16年間をつづっていたので、はじめはどう受け止めて良いのか迷った。

この本は小説であるので、実際はそうはいかないだろうというような理想的な書き方をされている。「家族には男も女も、年齢も関係ない」というメッセージが伝わってくる。ただ、同性愛者の家族というだけで、家族の

ありがた、家族間のおもいやりといったものは、共通しているのではないかと思う。

読後に知ったことだが、「虹色」というのは、同性愛者、セクシャルマイノリティの運動の象徴であるらしい。悲しい結末を迎えるのだが、肩の力をぬいて読める本である。

(か)



自分を好きになる方法

本谷有希子 著 講談社 2013年 (K:エッセイ・文学)

書名から自己啓発の本かなと私は思ってしまっただが、本書は長編小説で第27回三島由紀夫賞を受賞している。

主人公リンデの60年間を16歳、28歳、34歳、47歳、3歳、63歳の1日だけを切り取り描いていく。年齢が順不同なところに重大な意味があり、著者の並々ならぬテクニックがうかがえる。ある出来事を通して、その都度、関わる人たちとリンデが望んでいるものとの心のズレ、リンデ自身のもどかしさが巧妙に描かれている。

お互いずっと一緒にいたいと心から思え

る人と出会い、分かち合えることが、自分を好きになっていく方法のひとつであるのか。それとも、別の考え方、生き方、行動の仕方であるのか。

本書を読み進めていくうち、見つけ出せるかもしれません。

ぜひ、手に取って読んでみて下さい。

(K)



人を見捨てない国、スウェーデン

三瓶恵子 著 岩波書店 2013年 (A:フェミニズム)

スウェーデンといえば「福祉国家」と連想はするが、具体的なことは何も知らなかったため、本書に明かされている事実にただただ驚き、かつ羨望した。

著者は、現地の人と結婚し、スウェーデンに30余年住み続けている。仕事もし、息子二人を育てあげた自らの体験や、綿密な取材をもとに、スウェーデン国の一市民として生きていく上で享受できる高度な福祉を、図表や写真を多用して紹介している。

その例を挙げると、大学まで学費はただ、18歳まで医療費はただ、大学入試がない、いわゆる就活はなく、いつでも何回でも挑戦できる。

また、失業・病気・高齢・障がいなどで日常生活を送る機能が低下している人々のために、周到なセーフティネットが用意されているなどなど。夢のようである。

これらは税金で賄われるから、当然国民の

負担率が高いが、福祉水準を保つために、老後やもしもの時に備えて、「国に貯金している」と共有の意識を持ち納得しているという。

また、「政治」とは税金の使途を議論決定することと捉え、選挙の投票率はいつも83%前後あり、関心の高さを示している。

スウェーデンの人々はしかし、高福祉に甘んじるのではなく、支援を活用して、自らの道を開いていく「自立的な生き方」こそ、真に意味のある人生であると認識しているという。「私の人生はハッピー、スウェーデンに住んでいて良かった」と締めくくる筆者の実感に深く共感できた。

(大空)



生き方 人間として大切なこと

稲盛和夫 著 サンマーク出版 2004年 (E:こころ・癒し)

著者の稲盛氏は「読者の方々が生きる喜びを見出し、幸福に満ちた人生を送るための何らかのヒントを得ていただければ」と述べていますが、本書にはまさにそんな人間の生き方についての原理・原則と具体的な指針が書かれています。

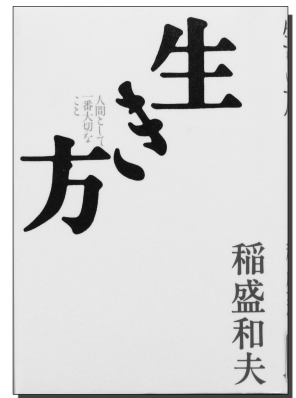
たとえば、稲盛氏は人生を一つの方程式で表現しています。「人生・仕事の結果＝考え方×熱意×能力」だと言うのです。人生や仕事の成果は“掛け算”によって得られるものであり、けっして“足し算”ではないため、考え方がマイナスなら、掛け算をすればマイナスの結果になるという訳です。能力もあり頑張っているのによい結果が得られないとすれば、それは考え方が間違っているからです。

それから氏は「あふれるほどの夢を描け、人生は大飛躍する」と述べています。どんな

遠い夢も思わないかぎりには叶わないし、そうありたいと強く心が求めたものだけを私達は手に入れることができるし、ひたむきに努力を重ねていくことを通じて人格も磨かれていくというのです。つまり夢や思いというのは人生のジャンプ台であると強調しています。

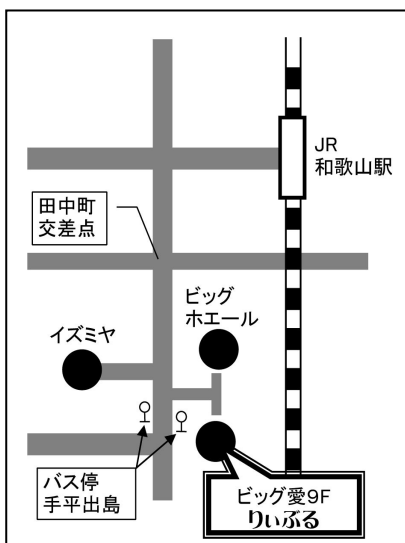
このように「京セラ会長」などの経営者としてだけでなく、得度をした僧として人間の生き方を広く企業や国家、さらには人類全体までも視野に入れ、わかりやすく語られた必読の書です。

(花賀)



※“りいぶる”での分類記号一覧

A:フェミニズム B:労働・法律 C:家族・結婚 D:女性・子どもに対する暴力 E:こころ・癒し F:子育て G:からだ
H:セクシュアリティ I:女性史 J:自伝・評伝 K:エッセイ・文学 L:高齢社会・福祉 M:男性学 N:資料・雑誌 O:その他
P:AV 資料 Q:コミック R:NPO サポートセンター所蔵図書



この本 よんだ? 第10号 (2015年12月発行)

◇企画・発行 りいぶるぷらす

◇協力 和歌山県男女共同参画センター“りいぶる”

【編集後記】私たちが紹介している本は、ビッグ愛9階にある和歌山県男女共同参画センターの小さな図書室の中にあります。眺めもよく、静かで、他の図書館ではかりられない本などがあり穴場的なところですよ。みなさんもきてみてください。

「この本よんだ?」も10号を迎えました。本好きな人が好きな本の話をしたりして、アットホームな感じでボランティアをしています。ボランティアに興味をお持ちの方はメールで問い合わせてください。

E-mail libreplus@yahoo.co.jp